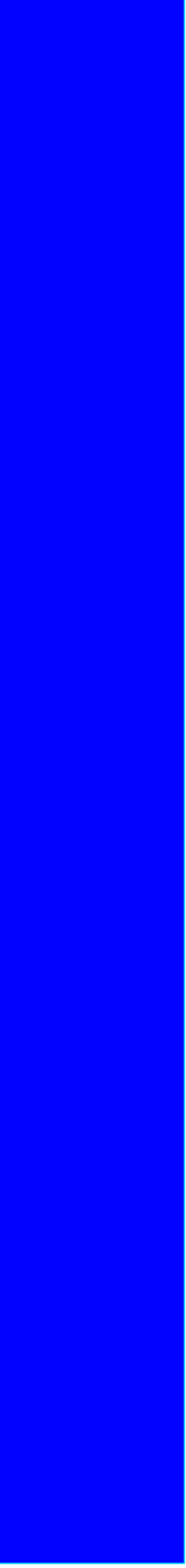


第1章 将来像	25
まちづくりの基本姿勢		
本町の基本的課題		
まちの将来像		
基本目標		
将来人口		
第2章 施策の大綱	32
こころふれあう健康と安心のまちづくり		
まちの誇りを次世代へ伝え育てる魅力あるまちづくり		
歴史・伝統に培われた風格と魅力ある快適なまちづくり		
産業の育成による豊かなまちづくり		
人々との交流による活力あるまちづくり		



第 1 章 将来像

第 1 節 まちづくりの基本姿勢

高野町は険しい山々や深い谷が連なる深山・紀伊山地の北端に位置し、豊かで雄大な自然に囲まれています。そしてここには 1200 年の悠久の密教文化が息づく世界に無類の宗教環境都市・高野山を有しています。このような素晴らしい文化・伝統・自然環境は、ここに住む町民のみならず、訪れる人々に安らぎと感動を与え、明日への活力と希望を湧き立たせる場所でもあります。

他方、高野町を取り巻く社会情勢はますます厳しさを増しています。昭和 50（1975）年 7,500 人を数えた町人口は、平成 17（2005）年には 4,600 人近くまで年々減少を続け、減少率は旧市町村域ベースで県内最悪となっています。これは、他市町村と同様の恒常的人口減に加え、高野山大学の学生数減少という、高野町の特徴的人口構造の変化が背景にあり、少子高齢化が急速に進行しています。また、全国的な行政改革の流れを受け、広域合併の途を模索あるいは選択する地方自治体再編の波が押し寄せましたが、高野町は町民の総意で自立（律）の途を選択しました。

私たちはこうした単独町制を選択した経緯を踏まえ、こころを一つにして新しい高野町を建設していかなければなりません。

一方、高野町にはこうした荒波を乗り越えて行ける強みがあります。それは、上述した緑豊かな心安らぐ雄大な自然と、古くから多くの人々に愛され、慕われ、支持され続けている悠久の聖地・高野山を有していることです。平成 16（2004）年にはユネスコにより世界遺産『紀伊山地の霊場と参詣道』の重要な一角として、未来に向けて“**守り伝えて行くべき世界の遺産**”として認定登録されました。

私たちは、こうした高野町を取り巻く潮流の変化を真摯に受け止め、こうした時代だからこそ“**モノの豊かさ**”から“**こころの豊かさ**”へと価値観の転換をしなければなりません。先人たちが営々と築いてきた世界に誇るべき文化・伝統、そしてそこに流れる精神を引き継ぎ、観光のまちとしても共生を図りながら、これらのかげがえのない資産を最大限生かした産業を振興し、豊かな地域社会を創っていく必要があります。そのためにも、だれもが健やかで生き生きとした幸せを実感できるまちづくりを推し進め、「住みやすい、住んでよかった、今後も住み続けたい」と思う住民本位の魅力ある町を一緒になって創っていく必要があります。

第2節 本町の基本的課題

1．人口減少と少子高齢化・過疎化の進展

高野町の人口は昭和40(1965)年までは9千人台を維持していましたが、その後、継続して減少傾向を続けており、平成17(2005)年には4,632人となっています。平成12(2000)年から平成17(2005)年の5年間で13.5%の減少と、全国の市町村で減少率20位、和歌山県内1位と急激な減少となっています。

人口減少要因は、自然動態では死亡者数が出生者数を上回っていることや、社会動態においても転出者数が転入者数を上回り、全体として毎年平均110名前後の人口減少となっていることです。なかでも社会減の主な要因は、ピーク時の平成7(1995)年には1,402名が在籍していた高野山大学の学生が、平成12(2000)年には961名、平成17(2005)年には331名と急減したことが主な要因と考えられます。

また、少子高齢化については、最近5年間平均の出生者数は20名となっており、人口千人当りの出生児数では、県平均7.7人に対し3.2人と県内最下位の状況です。また、高齢化率も平成12(2000)年の27.9%から平成17(2005)年には32.3%となり、県平均24.1%を大幅に上回っています。特に周辺集落においては、高齢化と過疎化が急速に進んでいます。このため、高齢者の知識・経験を生かした社会参加や、子供を安心して生み育てられる環境づくり、若者が定住できる魅力あるまちづくりを地域ぐるみで進めるなどの生活環境の充実が求められています。

2．生活・社会基盤の整備

町民すべてが高野町に愛着と誇りを持って快適に暮らすとともに、産業活動を盛んにしていくには、生活・社会基盤の整備を図っていく必要があります。

高野町は町域の7割が標高600m以上の高地で、急傾斜地が9割近くを占めています。このため主要な道路は急傾斜地に作られており、急な坂道と曲がりくねった狭い幅員の道路が多くを占めています。生活道路として、また、年間120万人の参詣者や観光客の利便性を図るうえでも、交通網の早急な整備と高野山内の交通体系の見直しが必要となっています。

また、周辺地域住民の交通手段の確保を図るためのコミュニティー交通の確保や、携帯端末、インターネット、デジタル放送などの高度情報化社会に対応した通信基盤の整備を町内全域で推進し、早期に実現することが求められています。

そのほか、東南海・南海地震や風水害・火災などに備え、災害に強い高野町をめざす必要があります。このため、学校などの耐震化、避難方法の確立などを行

うとともに、町民と行政が連携・協働して防災対策を始め、防犯や治安の維持などに努め、町民が安心して暮らせるまちづくりを進めていく必要があります。

3 . 保健・医療、社会福祉の充実

町民が生涯にわたって健康で安心して暮らせるためには、保健・医療、社会福祉の充実が重要な課題です。

医療については、医師の確保や経営面において困難な課題がありますが、町立高野山病院と富貴診療所の整備・充実や救急診療体制の維持を図り、町民のみならず参詣者や観光客の安心を確保する必要があります。

また、急速に進行しつつある高齢化に対応していくためには、町民一人ひとりが健康増進を図ることが必要であり、健康長寿ナンバー1 のまちをめざすためにも、健康相談、健康診査を充実する必要があります。また、高野町の未来を担う乳幼児及び児童・生徒の健康検査など、健康管理体制の充実をさらに図っていく必要があります。

また、子育て支援として乳幼児から小学生の医療費の補助を、県下で最初に中学生にまで拡大して実施しています。今後さらに地域ぐるみで子育て支援を充実する仕組みを構築する必要があります。

このほか、高齢者福祉、児童福祉、障がい者福祉、ひとり親福祉、生活困窮者などに対する福祉の充実については、厳しい財政状況ではありますが地域のボランティアや関係団体と連絡を取り合いながら、きめ細かく対策を講じていく必要があります。

4 . 産業の振興

高野町の産業は高野山への参詣者や観光客による観光産業が中心で、就労者の80%がサービス業に従事しています。今後若者の定住を図るためにも、観光に関する就労の場の確保が重要です。

高野町には年間約120万人の観光客が高野山を訪れますが、日帰り客が中心の観光となっています。このため、参詣者を中心とする信仰ツーリズム や豊かな自然や世界遺産を生かした観光などの高野の魅力を情報発信し、宿泊客の増加と通年の宗教と観光のまちとして、着地型観光を推進していくことが必要です。

農業については、高野町の地域や環境の特性を生かした特産品の育成や、観光産業との連携を行い、地産地消の促進を図るなど農業の振興を図る必要があります。また、林業については、高野材の利用促進を図るため公共施設への活用や、森林そのものを活用した新たな観光分野である森林セラピー などへの取り組みが必要です。

このように、地域の特色と産業の融和を図り、就業の場の確保及び拡大をめざ

し、自立した豊かなまちづくりを進めて行くことが必要です。

5 . 宗教都市の景観

高野山は、弘法大師空海の開創以来真言密教の聖地として、1200年の歴史と文化・伝統が息づく山上に発達した宗教都市で、高野町の顔です。

昨今のモータリゼーションの進展、及び平成 16 年の「紀伊山地の霊場と参詣道」の世界遺産登録を契機に、それまでの真言密教の聖地への参詣者中心の観光から、高野の歴史、文化、歴史的景観、豊かな自然環境、心のいやしを求めるなど、多角的な観光へと変化が生じてきています。

こうした訪問客のニーズの変化に対し、金剛峯寺を代表とする社寺の保全や防災対策、町石道などの史跡整備、寺内町の往時のまちなみに復元修景を進めるとともに、町民や参詣者中心の交通体系への見直しなどを進め、聖地にふさわしい風格と魅力ある地域景観づくりを進めていく必要があります。また、こうした活動は、高野山という世界に類を見ない山上の宗教環境都市を、未来に引き継いでいく私たちの誇りある尊い活動といえます。

第3節 まちの将来像

高野町の将来像を

歴史と文化を守り伝える“こころ”豊かな高野町

とします。

本町は、弘法大師空海の教えを守り伝える高野山を中心とした、歴史、文化、伝統、豊かな自然を有する町です。こうした誇り高き資質を町民共有の「宝」と認識し、それらを基盤とした豊かなまちをつかっていくとともに、モノと自然との関係で成り立っている空間をも環境と捉え施策していく必要があります。

このたび、私たち高野町の長期総合計画を策定するに当たり、将来像を上のように定め、前節で述べた町の基本的課題にしっかりと向き合い対処すべく、本町のまちづくりを進めていきます。

第4節 基本目標

まちの将来像実現に向け、基本的課題に対する部門別の基本行動目標を以下のように設定します。

部門別行動基本目標

こころふれあう健康と安心のまちづくり

まちの誇りを次世代へ伝え育てる魅力あるまちづくり

歴史・伝統に培われた風格と魅力ある快適なまちづくり

産業の育成による豊かなまちづくり

人々との交流による活力あるまちづくり

第5節 将来人口

1．高野町の現在の人口

高野町の人口は、昭和40（1965）年までは9千人台を維持していましたが、平成17（2005）年度の国勢調査では4,632人となっています。

また、高野町の人口分布の特徴は、他市町村に比べて20歳前後の住民が多く居住していることです。これは、高野山が山上の学園都市として、高野山大学の学生、同大学院生や高野山高等学校の生徒が居住しているためです。また、70歳前後の高齢者も多く居住しているという特徴があります。

平成17（2005）年の国勢調査では、平成12（2000）年に比べ、人口減少率は13.5%となり、全国の市町村で20位、和歌山県内で1位となりました。この要因は、ピーク時の平成7（1995）年には1,402人が在籍していた高野山大学の学生が平成17（2005）年には331人と急減したことが主な要因と考えられますが、一方で、子どもを持った家族の町外への転出もあげられます。

2．これまでの人口推計に基づく将来人口

高野町の将来人口は、国立社会保障・人口問題研究所の「日本の市区町村別将来推計人口（平成15年12月推計）」によると、平成22（2010）年4,168人、平成27（2015）年3,759人、平成32（2020）年3,394人と推計されていますが、学園都市、宗教都市である高野町の人口構成の特殊性による要因が加味されていません。学生などの居住状況を勘案し補正し直した町の推計人口では、推計値を上回るものと考えています。

3．政策効果を加味した将来人口推計

現在高野町においては、保育料の無料化や中学生までの医療費の無料化など先駆的な支援策を既に実施しています。ほかに町営住宅の建て替えや産業の振興による雇用の確保など、人口減少に歯止めをかけるための計画を策定しています。一方、高野山大学ではスピリチュアルケア学科の設置を行うなど、学生の確保のために積極的に取り組んでいます。

このように、本計画が掲げる取り組みによる効果が発揮された場合の計画最終年である平成30年の計画人口は、4,000人と見込んでいます。

高野町将来推計人口

